

石川 みなさんこんにちは。「同志社フェア in 熊本」のために鼎談を計画いたしました。題名は「熊本バンドを語る」です。熊本バンドについて、ここに來られている方は、ほとんどご存知だと思いますが、熊本バンドって何か、ご存知ない方もいらっしゃるかもしれません。熊本でなぜ同志社フェアを開くのか、びんと來ない方もいらっしゃるでしょう。湯浅理事長は安中から來られました。安中ってどこだろう。確か群馬県？ どうして群馬県の安中からわざわざ來られているのかと訝しく思っている方もいるかもしれません。今日は熊本と安中、そして京都・同志社を結ぶ関係を3人でお話しさせていただきます。

私は、同志社大学のキリスト教文化センターにおりますが、センターでは2年に1度、熊本に学生を連れてやってまいります。昨年の夏もまいりました。そしてもう1箇所、2年に1度行くところがあります。それは安中・会津。今年行く予定です。会津は今回の鼎談には入っていませんが、熊本と安中、この2つの場所はやはり同志社と深い関係があるということとです。どういう関係があるのかに

## レクチャー

### 同志社フェア in 熊本 記念講演会

# 鼎談：「熊本バンド」を語る

鼎談者 <sup>ゆ あさ こう き</sup> 湯浅康毅 学校法人新島学園理事長

<sup>うち むら きみ はる</sup> 内村公春 社会福祉法人慈愛園理事長

<sup>いし かわ りつ</sup> 石川 立 同志社大学神学部教授・キリスト教文化センター所長（司会・進行）

※当時の所属、職名となります

ついて、これから鼎談者それぞれの立場から自由にお話を進めてまいります。

まず、鼎談を始める前に2つお断りしておきます。皆様の中には鼎談を聞いて色々質問や突っ込みを入れたいと思われる方も出てくると思いますが、今回はシンポジウムではないので質問はご遠慮いただきしたいと思います。こちらでお話をさせていただくこととなります。もう1つは新島襄、キーマンですが、新島襄の呼び方です。基本的に新島襄先生とは申しません。新島襄と呼び捨てにいたします。「新島先生」のほうが言いやすい方もおられますが、新島本人が先生と呼んでくれるなどおっしゃってもしましたので、尊敬を込めてですが、呼び捨てにさせていただきます。

さて、鼎談は、熊本バンドがテーマになりますが、その前に熊本バンドの歴史ともいべき日本に於けるプロテスタント教会についてまずは知識をもつておいていただきたいと思えます。

カトリックのほうはフランシスコ・ザビエルの昔になりますが、プロテスタントの日本での始まりは比較的歴史が浅く、1859（安政6）年にくつつかのプロ

テスタントの教派の宣教師が日本にやってきたことに端を発します。長崎にフルベッキというオランダ改革派宣教師が来ましたし、ウイリアムズというアメリカの聖公会（イギリス国教会）の宣教師もやってきました。横浜にも、長老派の、ヘボン式ローマ字で有名なヘボン（ヘツプバーン）宣教師が来ました。ヘボンはお医者さんです。また、長老派と似ているアメリカのオランダ改革派の宣教師ブ



ラウンもこの年に横浜に来ました。横浜では、プロテスタントとしては日本で一番早く、1872（明治5）年に9人の受洗者が出ました。それで、プロテスタントでは最も早く、横浜にアメリカのオランダ改革派および長老派の教会が建ちます。そこに後に三大バンドのうちの横浜バンドと呼ばれる若者の集いができました。（ちなみに、三大バンドのもう一つは、札幌農学校のクラーク博士の影響のもと、「イエスを信じる者の契約」に署名した内村鑑三、新渡戸稲造らの札幌バンドです。）

他の教派から遅れること10年、1869（明治2）年に、アメリカン・ボードの宣教師がまずは横浜にやってきました。グリーンという新島襄とほぼ同じ年月日に生まれた宣教師です。アメリカン・ボードはボストンが本拠地で、主に会衆派と呼ばれる教派の宣教師が属していました。

その頃には既に長崎にも横浜にもプロテスタントの宣教師は来ていました。それでは他にどこに行くか。縄張りというわけではないでしょうが、まだ宣教師のいないところを探すわけです。10年も遅

れているので、まだ空いているところ、神戸にいくことになりました。当時の神戸はそれほど大きくない町で、神戸をして隣の大きな町・大阪がアメリカン・ボードの本拠地となりました。それ以降、多くのアメリカン・ボードの宣教師がやってきました。ゴードンもそのひとりです。

そして1875（明治8）年、アメリカン・ボードの新しい宣教師が大阪にやってきました。それが新島襄です。

新島襄については改めてお伝えすることもないので、簡単に最初のところから辿っていきますと、襄は1843（天保14）年2月12日に江戸で生まれました。当時の江戸には日本各地の藩の屋敷が置かれており、新島家も安中藩の武士でしたので、襄は江戸の安中藩邸で生まれました。藩邸は神田にありました。安中は新島にとつては実家ということになります。新島は小さい頃は七五三太（しめた）といい、子供の頃から外国に憧れをもっていました。憧れが高じて結局のところ、見つければ死罪になることがわかつているにもかかわらず脱国することになります。最初に函館からベルリン号

に乗り、上海でワイルド・ローバー号に乗り換えて約1年かけてボストンにたどり着きます。ワイルド・ローバー号にたまたま乗り、その母港がボストンだったため、ボストンに着いたわけです。幸運にも、船主のハーディーさんからすべての資金、つまり学費、生活費すべてを援助してもらい、10年弱のアメリカ生活をすることになります。彼はフィリップス・アカデミー、アーモスト大学、アンドーバー神学校の3つの学校を出て、牧師になり宣教師として日本に帰ってきました。最初、武士として脱国しましたが、帰ってきた時はキリスト教の宣教師になっていました。1874（明治7）年11月26日に横浜で、1869年アメリカン・ボードの宣教師としては最初に日本に来たグリーンに迎えられました。アメリカ人のグリーンが同い年の日本人・新島襄を日本で出迎えたわけです。襄の赴任地は大阪と決められましたが、まずは10年ぶりに家族に挨拶に行きます。その頃、時代は明治になり、両親は江戸（東京）ではなく安中に住んでいました。新島は大阪に行く前の1874年11月28日夜半に安中にやってきました。

この安中で、新島にとつて最初の伝道が始まります。最初の赴任地に行く前に最初の種が撒かれることになりました。最初に信者になった人たちがいます。その中の一人が湯浅治郎という方でした。湯浅治郎は、新島が安中に留まったひと月足らずの間に新島の話聞いてクリスチャンになる決心をしました。この辺り、どういいう出会いがあったのか、事情を湯浅さんから伺いたいと思います。

**湯浅** 改めましてこんにちは。このような節目の年、同志社創立140周年を迎える時に群馬・安中からお招きをいただきありがとうございます。先ほど石川先生からお話しいただいた通りなのですが、詳しい史実とか関係関係とかは石川先生の方がよほど詳しいかと思われませんが、新島襄は明治7年に両親の暮らす安中にもどつてくるわけです。湯浅家は安中市内の醤油の醸造元で、治郎は3代目の当主でございました。近くに龍昌寺というところがあり、そこで新島先生はお話をされ、おそらくそこで初めて出会うわけです。その前からお父様やお祖父様とはお付き合いはあったそうですが、新島襄と湯浅治郎が出会ったところは、この龍

昌寺が初めての場所でしょう。日本にいる時に襄はアメリカの議会民主主義に触れることによつて「脳みそがとろけるようだ」とおっしゃったという有名なお話があります。おそらく治郎も新島襄の話聞いて「脳みそがとろけたのだ」と思います。大きな衝撃を受けたのでしょうか。

**石川** 湯浅治郎は、この出会いによつてクリスチャンになり、後に安中教会が作られていきます。教会を支えるという重要な働きをしていきます。同志社英学校運営にも尽力した方です。

襄は10年ぶりに両親の民治さんと登美さんに会いました。既におじいさんも弟の双六も亡くなっていました。10年はとても長いスパンです。そして、いよいよ赴任地に移っていきます。1875年1月に大阪にやってきます。ゴードン宣教師のところを下宿し、先輩アメリカ人宣教師たちの手伝いをするようになります。宣教師が新島襄の本業ですが、アメリカで学校に行かせてもらい、日本でも是非学校をつくりたい。しかもキリスト教主義の学校をつくりたいという夢を襄はずっともっていましたので、宣教師の仕事

をしながら、学校を建てる準備もすすめていきました。1875年春、京都旅行中に、当時京都府の顧問をしていた会津藩出身の山本覚馬に出会います。この出会いが大きかった。山本覚馬が御所の北に旧薩摩藩邸の土地を持っており、安く譲ってもらえることになって、ここに学校を建てようということになった。こうして1875年11月29日、今から約140年前に、山本覚馬と新島襄によって「同志社英学校」が建つことになるわけです。教師は宣教師デイヴィスと新島の2人、生徒8人の出発です。年末までには学生はもう少し増えて24、25名位にはなりましたが、それにしてもまだまだ小さな学校、というより今日の学習塾のようなものだったでしょう。カリキュラムがしっかりとっているわけでもなく、学校を出ると就職できるわけでもない、吹けば飛ぶような学校、また土台も定まらない、新島の夢だけで建っているような学校でした。

そんな学校が急に学校らしくなりました。それは翌年1876（明治9）年9月のことでした。学生たちがどおつとやつてきました。

は有名な北里柴三郎がいます。

熊本洋学校が明治3年にスタートします。発端は、横井小楠の甥で横井太平（だいへい）という人がいて、病気で留学をやめ長崎で静養していたのですが、この人が、西洋の教師を雇って教育をすべきだと藩庁へ進言をします。やって来たのが、南北戦争の退役将校のジェーンズです。ちょうど札幌農学校のクラークと同じ立場ですが、本来は通訳を連れてくるのですが、ジェーンズは通訳を連れず、全部一人で、しかも全部英語でやるという破天荒な教育をはじめていきますところがそれに学生たちはついていくのです。もちろん大変な秀才ばかりです。最初の受験者は400〜500名くらいです。1回の入学者は45名程です。そして卒業するのは11名くらいです。大変な教育だと想像がつかます。中身はすべて英語で行ない、教師もジェーンズが一人で教えます。教科書もすべて英語です。西洋で使っていたのと同じ教科書を輸入して教えたのです。辞書としては、北海道の開拓使が編纂したものを使ったと言われています。

ジェーンズが教えたのは午前と午後各

この学生たちが熊本から来た、後に熊本バンドと呼ばれる学生たちでした。ではこの熊本バンドの人たちは熊本からどんな事情で同志社に来たのでしょうか。この辺りの事情を内村先生にご紹介いただければと思います。

**内村** こんにちは、内村と申します。

皆さんの中に熊本バンドについてもつと詳しい方もいらつしやるのですが、時間の関係上、大まかな話をさせていただきます。

1876年、次の年が西南戦争になります。前の年の1月30日に、29日という説もありますが、普段よく登っていた花園山に熊本洋学校のメンバー35名が登り、キリスト教を奉じ、それを日本全国に広めようという誓いをします。奉教趣意書に署名します。この時参加していなかった、後から来た人も含めて約40名が同志社に進みます。高い能力と特異な熊本らしい個性を發揮した学生たちを、当時の同志社の宣教師たちが名づけて「熊本バンド」と呼びました。バンドとは、グループとか班という字を当てます。グループ名をさしています。本当に能力が高くて、教育課程などを持ち込んだのは熊

本バンドでした。つまり熊本洋学校で学んだ教育課程をそのまま同志社に入れ込んだということになります。それでは、熊本洋学校とはどんな学校だったのか簡単に説明します。

幕末期にかけて薩長土肥という西南雄藩が強い政権を握ります。そのため、それ以外の多くの藩が時流から外れ立ち遅れていきます。熊本も同様でいくつかのグループが対立を繰り返しながら維新の流れに立ち遅れていきます。そういう中で実学党という儒学者・横井小楠の門下生たちが中心となったグループが、藩をどうにかしたいと政権を握り、改革をはじめます。1870（明治3）年のことです。実は、徳富蘆花が『竹崎順子』という本の中で「熊本の維新は明治3年やつてきた」と書いています。それがそのことを指しています。そこで力を入れるのは何か。富国強兵です。熊本藩も富国強兵を考えます。しかし西洋の文化をとり入れるためにはそれだけの能力が必要で、そのための人材が必要と考え学校を立ち上げます。それが熊本洋学校と医学校になります。今日は医学校については申しあげませんが、医学校の卒業生に

1時間ずつで、後はすべて自学自習でした。翌日、前日学んだことの復習のために、授業中質問形式で尋ね、答えられないと席順を後ろへ下げる。そういうことを繰り返して、競争をとりいれていきます。おそらくはジェーンズの学んだウエストポイント陸軍士官学校の教育を真似たものだと思われれます。見込みのない者は退学をさせるといふ厳しいやり方でした。こうした教育で学生は鍛えられていきます。また洋学校が何年か経ち生徒数も増えてくると、ジェーンズ一人では当然教えられなくなりまます。そこで1、2回生から優秀な者を選び出して彼らに下級生を教えさせるといふ班別授業のような形に進めていきます。

このような授業の中で学生たちは目を開かれる体験をしていきます。海老名弾正の感想をその弟子が書き残しています。たとえば「論語や孟子はわからなかったけれども、英語のリーダーはわかるからおもしろい。学問の出発は分かることからであろう。わかるから興味が沸く。」「科学を学ぶ中でいろんなものが生きていくことがわかってきた。関係していることがわかってきた。目に見えぬものに

も見えるような、目を開かれる体験をしました。授業が終わって寮に帰る時には輝くばかりの、晴れ晴れした顔、判った嬉しさでわくわくしたような顔をして帰った」と伝えられています。こうした点で、教育の原点をこの洋学校は示している気がします。

そういう中で3年目にはジェーンズはその成果をこう書き残しています。「生徒が到達した学力レベルはウエストポイントの陸軍士官学校に勝るとも劣らないと言っています。その他特異な教育としては男女共学を初めてやりましたし、演説法をとりいれました。慶応義塾も演説法をとりいれていましたが、日本語の演説法でした。ところが洋学校の演説は英語です。ジェーンズは英語で演説法を教えました。有名な英語の演説を暗唱して述べる練習です。これがとても役に立つたと言われています。現在でいえばプレゼンテーションの授業のようなものをつくりいており、同志社においても同じようなことを始めたと言っています。こうした教育が同志社にも植え付けられていくにつれ、大きな成果を發揮しました。反面、徳富蘇峰はジェーンズに対し

て批判的でした。自分は最悪な扱いを受けていたという感想を残していますが、そういうところはまた面白いのですが、こうした洋学校からの上級生との人間関係が多分同志社での自責の杖事件を引き起こすことになっただろうといわれています。

このような洋学校での学びの中でキリスト教を誓うということをやったわけですが、ところが1876（明治9）年に横井小楠がキリスト教の嫌疑をかけられて暗殺されました。一番恐れられたキリスト教を生み出した。その結果、実学党政権自体も次第に力を失い、洋学校も閉校へと追い込まれていきます。もちろん学生たちはものすごい迫害を受けますが、耐え抜いて信仰を守って行きます。ジェーンズは、明治9年以降は再契約されないで辞めることになりました。こうした事態を予想しジェーンズは、以前から同志社のデイヴィスになんとか学生を引き受けてほしいと頼んで送り込んだのが同志社英学校ということになります。

**石川** ジェーンズは同志社英学校をどうして知っていたのでしょうか。

**内村** ジェーンズはオランダ改革派（長老派）からやってきましたので、もちろ

んフルベッキとかも知っていましたがおそらくアメリカの宣教師仲間ですからデイヴィスも知っていたのでしょう。

**石川** ジェーンズはオランダ改革派で、教派としては違うのですが、アメリカン・ボード（会衆派）のデイヴィスを信頼して学生たちを送ってきたようです。こうして1876年9月に40名近い学生が同志社にやってきました。同志社は当時レベルが低かった。カリキュラムもなければ設備もしつかりしていない。そういうところに非常にレベルの高い学生たちがやってきた。学生の間には大きな学力の差がありました。元からいた学生の中にも優秀な人がいたのですが、ジェーンズの軍人らしいスパルタ式の厳しい教育で訓練された熊本洋学校の学生たちが同志社のだらあつとした雰囲気の中にやってきたわけです。元から居た学生にとってみれば「これは一体何事だ」というところですね。

学力のある新しい学生たちの参入で学生の間には強い競争心が生じました。教師に対する不満も出てきて、学生の中にもいざこざが生じ、学生によるストライキが起こります。留守がちだった新島は、



行ったところが安中です。安中では早々とキリスト教の種が植えられ、湯浅治郎

はじめ多くの信者が出ました。海老名弾正は卒業後、安中に行き、本格的に伝道活動を始めます。安中教会もできます。安中でのようにキリスト教が広がっていくのか、その辺りからその後のことを湯浅さんにお話しただけだと思います。

**湯浅** 石川先生が、鼎談のはじめに、な

このことの責任は校長である自分にあると考え、自らの手のひらを杖も折れるほど何度も打ったという、有名な出来事が起こります。同志社はこの杖をずっと保存しております。このようなことが後に起こるほどに熊本洋学校の学生が入ってきたことは同志社にとって激震でした。

以上の出来事は少し後の話（1880（明治13）年4月）ですが、ともかく、熊本バンドの参入によって同志社はピリツとしたといいますか、学校として本格化してきました。熊本バンド化しました。そこで急遽、余科、上級のクラスですが、当初計画していたバイブル・クラスと呼ばれるものを設置して、熊本からやってきた学生を入れました。1879（明治12）年6月、第1回卒業式が行われ15名が卒業します。全員が熊本バンドです。

多くは牧師になり、各地で教会を建てていくことになりました。ただし、新島の教育観は、学生はキリスト教精神をもって社会の様々な分野で活躍して欲しいというものでした。これが同志社の特色ある教育で、卒業生のなかには牧師もいれば、教育界や政治の世界で活躍する人もいましたし、文学者もいました。これが新島

のめざすところでした。ただ、どの分野にあっても、キリスト教精神をもっていないければならないと考えていた。

新島はジェーンズとは違い、学生たちに、平等であること、自治自立、自由、良心、奪うのではなく与える教育ということを教えました。それは奉仕であり、人のため、社会のため、隣人のため、国民のために自分を使っていくということを目指す教育でした。ですから、卒業生たちは聖職者だけでなく、いろんな分野で活躍することになるのです。

最初は牧師になる人が多く、日本各地に教会を建てました。小崎弘道、海老名弾正、宮川経輝のちにキリスト教組合教会の3元老と呼ばれますが、こういう人たちが第1回目の卒業生として各地へ伝道に赴きました。この中の2名は社長つまり総長になっていきます。一方、徳富蘇峰、蘆花のような人たちも学びました。いろいろな分野で活躍する人物が同志社から出て行きました。

海老名弾正の名前が出ましたが、第1回目の卒業生で、同志社総長もした人です。学生の頃から、すでに安中に伝道に行っています。新島襄が帰国後、最初に

ぞ群馬県・安中の人が熊本に来て、何をしゃべるのかと言われましたので、今の質問も含めまして、熊本と安中が繋がるような3つの視点でお話をしたいと思いません。

冒頭に申しあげましたように、私は湯浅治郎を高祖父にもつ立場ですが、湯浅治郎の残した言葉の中に「右の手の為すを左の手に知らしめず。」という言葉がございます。そのとおり何にも資料が残っていないのです。今日は、明治7年に新島先生と出会って聖書の学びを始めた湯浅治郎の署名のある聖書とともに旅してきましたが、こういう限られたものしかありませんので、新島先生から大きな影響を与えられた背景を持つ環境の中で育った私がどう感じているかを話させていただきます。

まずはじめの視点ですが、私個人にとつての熊本についてです。私は元々有田屋という醤油屋ですので、醸造屋にとつて、熊本はものすごく重要な場所です。7代目の醤油屋として、味噌の神様、本村神社が祭つてある熊本は大変重要で、2つ目は、新島学園の大先輩であり、同志社大学神学部教授、同志社大学学生

部長を歴任されて、のちに新島学園の3代目の校長として尽力された故岩井文男先生のご子息、岩井善太先生に鶴屋百貨店で関東の辛い醤油を販売する機会があった時に会いました。その時にある女性に会いますが、その方との出会いがなければ、私はいま、こうして醤油を作り続けることができなかつただろうし、また昨年からの新島学園理事長という立場にあつたかどうか。熊本は人生を左右する人物に出合つた重要な土地です。

3つ目は、湯浅家として、熊本の地との関係性を申しあげますと、お手持ちの資料の通り、熊本の地と安中、また湯浅家が繋がる、血縁関係に繋がるというのはなんといつても徳富家です。この熊本、水俣の徳富家と旧姓徳富初子がわたしの高祖父の湯浅治郎の後妻にはいられたことで直接繋がるわけです。初子のお父様の徳富一敬は、治郎の漢詩の先生でございます。治郎の雅号、雲外を名づけて下さつた方です。一敬から治郎が漢詩を添削してもらつたようなものも残つております。治郎は徳富蘇峰と同志社を卒業した後も民友社での関わりがあり、治郎の

弟、先ほどお話のあつた自責の杖の時におそらく徳富蘇峰とともに行動したであろう湯浅吉郎、後の半月は蘇峰と学友です。

こういう関係でしたので、明治15年に新島先生が同志社の学生を連れて中山道の旅をされた折、徳富蘇峰と吉郎と伊勢時雄と一緒に旅をしています。その時は、安中・有田屋で八重夫人が新島先生や学生をお出迎えし、御夫妻で有田屋に泊まられたことがございました。同志社の学生は山田屋に泊まるということでした。

私の祖父、湯浅正次は新島学園第2代の理事長ですが、徳富蘇峰に「しようぼう、しようぼう」と大変可愛がられたそうです。正次の父、私の曾祖父の三郎の墓碑名を書いたのも蘇峰で、正次が鎌倉に行つてお願いして書いてもらつたという話も残っています。私の醤油屋として、個人としての熊本の師弟関係、そして湯浅家としての関係について御紹介いたします。

最後は、先ほど石川先生からのお話にありましたとおり、安中と熊本、熊本バンドが繋がるのは、海老名弾正になると

に出向かれて教会を設立されたりしています。熊本洋学校のご出身ですが、その後、熊本にもどり、熊本英学校を創立され、その後同志社総長に就任されます。

ご家族の関係では、奥様のみわさんというのは、横井小楠の娘で、横井時雄の妹にあたります。湯浅初子と一緒に同志社で学んだ仲で、海老名弾正の奥様になります。初子と治郎の結婚の時には一緒に伊香保温泉へ行つたりしたと聞いております。

このように、明治7年に新島襄が上州・安中にもどられて安中にキリスト教の種が撒かれ、その4年後に聖書の学びを通して海老名弾正が派遣されてきます。湯浅治郎は、この時、自ら日本人がクリスチャンになるという道を選んで、自治自立のキリスト教の教会が出来上がるのですが、撒かれた種そして聖書の学びがあつたからこそ、その後の安中教会設立につながり、1947（昭和22）年に生まれる新島学園に繋がりました。キリスト教の種が代々違つた形で育まれて、じつくりと時間をかけて現在に至つているのだ、という印象を個人的に持つている

わけです。  
**石川** ありがとうございます。補足しますと、同志社のエンブレム、三角形三つの楔形文字をデザインしたのですが、これは湯浅治郎の弟の、神学部教授もされた湯浅吉郎（半月）が作りました。アツシリア文字で、国とか土を意味します。ムツウと発音するようです。湯浅家はそこの土地のキリスト教会のためにも非常に多くの援助をされた家ですが、同志社を本場にいろいろ援助してくださつた。そしてその同志社に援助されたものがまた今度は安中に帰つて、安中で新島学園ができた。そういう感じかなと思います。新島学園が安中にできたように、同志社は援助を受けながら、同志社が今度は新島精神を各地に運んで行くという働きをしていきます。

この点において、九州学院もまた同じように同志社との関係があります。先ほど阿部院長から、何人かの院長が同志社出身であると紹介されましたが、初代の院長が熊本バンドとも同志社とも関係があるのですね。その辺りを内村先生にお話し願います。

思います。徳富蘇峰とともに同志社で学んでいた海老名弾正ですが、資料をめぐっていたいた2枚目の上の方に書簡がございますが、これは新島襄が湯浅治郎に宛てた書簡です。日付が明治10年6月19日となっています。先ほど石川先生がおつしやつたとおり、夏期伝道の時に、まだ安中教会が設立される前のことで、聖書を使って勉強会を行なつている時に、学生であつた海老名弾正を派遣するという内容の書簡です。この書簡は現在、地元安中教会で保管されていますが、言つてしまえば、まさにこの瞬間、熊本と京都と安中が繋がつたことを記念する書簡ではないかと思つております。書簡の下のほうの資料は有田屋で所蔵しております海老名弾正の写真ですが、今でも会堂内の、向かつて右側に、昨夏の「同志社フェア in 安中」で有田屋にお越しになられた方にはご記憶があるかと思いますが、海老名弾正の肖像画が飾られております。海老名弾正は安中教会の初代牧師として派遣されるわけですが、合計7年間勤められました。その間、前橋に転居して前橋教会を設立されたり、他の地

**内村** 阿部院長のご挨拶にありましたように、最初の院長・遠山参良（とおやまさぶろう）は、熊本洋学校の5回目の入学生ですが、入学してすぐ廃校になり、当然洋学校を卒業していません。海老名弾正に可愛がられまして、一緒に初期の同志社英学校に入学した人です。同志社卒業後、地元に戻ってきて、熊本洋学校廃校の後、その意志を受け継ぐ人たちが作つた私塾広取（こうしゆ）学校で学びます。その後、長崎県大浦の私立加伯利（カプリ）学校（後の鎮西学院）を卒業して教師となります。さらにアメリカに留学した後、九州学院に来る前には、夏目漱石の後を受けて第五高等学校（後の熊本大学）の英語科の主任教授に就いています。九州学院については、当時、ルーテル教会が伝道のための学校を作りたいということで、人材を探しており、遠山は、そのルーテル教会のチャールズ・L・ブラウン宣教師と汽車の中でたまたま出会うことをきっかけに依頼を受け、初代院長になりました。遠山の在職には何度か海老名弾正に熊本に来てもらい講演会が開かれました。弾正が遠山に昔

を懐かしむようなまなざしを向けていたという思い出が書かれた文書が残っています。そういう面では九州学院は最初から同志社との繋がりがありました。その後は多くの学生たちが同志社に進学することもあり、幸いにして阿部院長の言われたような繋がりができて、さらに多くの学生たちが同志社に向かうことになっています。ここ数年の関係ができたことは大変うれしく思います。

先ほどの話に付け加えますと、熊本バンドの同志社へ行った連中はやはり相当生意気で、言ってみれば『ジェーンズ教』というように、ジェーンズを大変尊敬していました。逆に言えば、同志社の先生たちに飽きたららない。相当生意気だった。それがいろんなことを引き起こしました。新島襄はそんな学生たちをつきはなさず、たとえば「個儻不羈（てきとうふき）」という有名なことばがありますが、個性を大事にする、温かく包みこむような愛で育てたのではないかと思えます。ジェーンズの人格教育にも大きな愛があったのですが、さらに新島の教育によって彼らは大きく育った。その中で

育ったのがベルリン号、さらにたまたま乗ったのがワイルド・ローバー号です。本当にたまたまです。着いたのがワイルド・ローバー号の母港、ボストンでした。たまたま乗ったワイルド・ローバー号の船主に資金面をすべて支えられ、3つの学校を出て宣教師になりました。ハーディーとの出会いに支えられた人でした。同志社ができてからも、いろいろな方と出会いました。いろいろな方からいろいろな助けを得て同志社が成り立っていることがわかります。ハード面では湯浅家、安中教会、安中という土地の助けなくして、同志社はなかっただろうと思います。ソフト面では熊本洋学校の学生たち、熊本バンドの学生たちが来なければ今の同志社はなかっただろうと思います。いろいろな出会い、そしていろいろな助けがあつて今の同志社があるということをおぼえていただきたいと思います。

いろいろな方との出会い、いろいろな方からの助けによって成長させていただいた今の同志社は良心教育、自由、自主自立という新島精神を守っています。こ

もそれを強く感じたひとりが徳富蘇峰という人でした。その辺についてはよくご存知の方もいらつしやると思います。以上です。

**石川** ありがとうございます。もうひとつ、新島学園のことで、皆さんのお手元に資料があると思いますが、資料の写真的部分、「新島学園誕生ものがたり」のところについて少し説明をしてくださいませんか。

**湯浅** ありがとうございます。昨年の4月に第5代の理事長としてお招きいただいた際に、地元紙に掲載させていただいたものを本日ご用意しました。右側が私で、一緒に写っているのは中島ノブユキ君で、新島学園での同級生です。ご承知の方もいらつしやるかと思いますが、2012（平成24）年NHK大河ドラマ『八重の桜』で音楽を担当された音楽家です。彼と一緒に母校を訪ねながら、安中の新島学園の歴史に触れるような、一緒に旅をするという企画で、新島学園のいわれについて写真を中心に表現いたしました。先に触れましたように、明治7年に新島襄と出会ってから、掲載してい

の新島精神が、次に学校や教会を通して日本各地に浸透していくということを見させてくださいるところです。

今の日本では経済が最重要視されていて、成果主義、効率主義、最終的に高い数字、良い数字、大きさ、そういうものが追求されています。しかし、人間はそれだけでは評価できないと思います。人間は日々生きていくプロセスが大切です。学生の成長していくスピードもまちまちで、個性がありますから一人一人に合った教育がなされないといけないと思えます。学校を出てからも、人それぞれですから歩み方もさまざまです。新島はそういうことを見越して、それぞれの個性を大事にしながら個性を教育の中で育てていこうとしました。その人らしさを出し、それを尊重していこうという精神が新島精神です。人から助けられ、また人に返していく。教育のなかで育てられた生きていく力を今度はお返ししていく。同志社はこれまでもそうできていたと思えますし、これからも、いよいよそうしていかなければならないと思えます。

今回は『熊本バンドを語る』というテ

るような軌跡で、写真のとおり、新島精神というものが上州・安中の地で、ずつと育まれている、これを元にこれから未来に向かつて進んでいくのだ、新島襄の精神の聖地であるこの上州・安中をこれからも守っていくのだというメッセージを込めて掲載しました。字が小さくて申し訳ありません。

**石川** 右上にパイプ・オルガンが写っていますか……

**湯浅** はい、パイプ・オルガンがあります。大河ドラマの中で襄と八重が出会って結婚式をするシーンがあるのですが、パイプ・オルガンの音が流れるのです。それはこの新島学園のパイプ・オルガンを収録しております。彼（中島ノブユキ氏）は大河ドラマのために百曲くらい作曲しているのですが、第1回目に流す音楽、最初の音楽はやはり自分の育った新島学園のパイプ・オルガンでスタートする音楽作りをしたいということで、使っていました。

**石川** ありがとうございます。新島襄という人は本当にいろいろな方と出会って成長した人ですね。最初の方でも申しあ

りまして3人がお話をさせていただきました。もちろん不十分で、もつと聞きたい、もつと話したいという気持ちがあります。時間になりましたので、これで鼎談を終わらせていただきます。またこのような機会に、ともどもに学び続けることができればと願っています。

ありがとうございます。

（2016年1月29日、九州学院ブラウン・メモリアルチャペルにて）

## 変化の時代にこそ 夢を大切に

今日は皆さんに会えるのを楽しみにしてきました。いま世の中はもの凄い勢いで変わっています。変化の時代を子どもたちは生きていきます。でも残念ながら僕たちの常識は、もしかすると子どもたちを苦しめているかもしれません。そんなことに気付いてもらえるようなお話にしたいと思います。

僕の話は仲間を探すための話です。まず「思うは招く」。これは中学校2年生の時に母が教えてくれた言葉で、「思ったら、そうなるよ」という意味です。この言葉のお蔭で僕はいろんなことができようになりました。そして「夢があれば何でもできる」。残念ながら大人の中には「夢があっても食えないよ」という人もいますが、本当は夢があれば何でもできます。ですから皆さんには、ぜひ素晴らしい夢をたくさん持つてほしいです。僕は小さい頃から色々なことに興味がありました。車とバイク、ゲームにアニメ。「銀河鉄道999」は命や自由につ

楽してお金をもらえるのがいい会社だ」と教えてくれた。勉強は能力をつけるためにするものです。でも先生は、「その能力を使わないで済むために勉強するのだ」と言う。お金があることは確かにいいことかもしれませんが、でも高級なドレスを着られるのは金持ちだからでしょうか、高級車に乗れるのは金持ちだからでしょうか。違いますね。ものづくりをする人がいるからです。

## 失敗との向き合い方

僕は今、北海道の赤平市でいろんな物を作っています。ロケットもそうです。打ち上げの時に失敗したらどうしようと思うと、誰もがプレッシャーで吐きそうになります。打ち上げが成功したらみんなが感謝し合います。自分のお蔭で成功したと言う人はいません。

でも僕はそういう喜びを知らずに育ちました。僕は「ちゃんとしなさい」と言われて育ちました。それは「人に迷惑をかけないこと」だろうと思いましたが、どうすればいいのか。「責任を避ける」のが簡単な方法です。僕は「ちゃんとし



## レクチャー

同志社中学校・高等学校父母の会 父母のつどい2015

# 「あきらめない」 児童虐待を無くすために宇宙へ向かう

講師 植松 努氏

株式会社植松電機 専務取締役

株式会社カムイスペースワークス 代表取締役

NPO法人北海道宇宙科学技術創成センター(HASTIC) 理事

いて教えてくれたし、「キャシャーン」「デビルマン」「タイガーマスク」は、ひとりぼっちに負けない勇気をくれた気がします。応援されなくても認められなくても、否定されても頑張る勇気が、僕を支えてくれた気がします。

「夢」って何でしょう。僕は昔、小学校の卒業文集で「僕の夢、私の夢」に「自分の造った潜水艦で世界の海を旅したい」と書いて、先生に怒られました。みんな将来の仕事を書いているのに、どうしておまへはできもしない、夢みたいなことを書くんだと。でも世界初の潜水艦はエンジンも無く、中に入った人が手でスクリューを回すものでしたが、アメリカの独立戦争で本当に使われた。昔の人が造れたんだから、自分にも造れると思いました。それを知らない先生は僕の話聞いてくれない。夢って、既にある仕事から選ばないといけないんだろうか。今できないことを追いかけるのが夢なのではと僕は思いました。

中学校ではこう言われました。「ちゃんと勉強しないと、いい学校、いい会社に入れないよ」。先生は「安定して

よう」と思っ、人に頼らなくなりまして。弱みを見せなくなり、心を開かなくなりました。孤立してしまつた。

大切なのは責任の避け方ではなく、子どもに責任の受け止め方を教えることです。そして責任とは素晴らしいものだ、責任の向こう側は素晴らしい仲間がいるんだと教えることです。

今やロケットは非常に安全なものになり、さまざまな研究機関が実験に使つてくれています。そんな僕らのロケットも、始めた頃はさつぱりうまくいきませんでした。ロケットを飛ばすなんてやったことがないからです。でも人間は、やったことがないことにしか出合わない。なぜなら人間は、一回しか生きられないからです。ということは、人間は必ず失敗する。失敗は乗り越えたら、階段の一部になります。だから「失敗したらどうするの」なんて、絶対に言つてはいけません。

「失敗したら、どうすればいいか一緒に考えよう」と言いましょ。人生も同じです。失敗を恐れるより、頭の中で嫌な未来を見つめればいい。そうすれば嫌な未来にならないための準備ができるし、

嫌な未来になったときのための準備もできる。前へ進める。だから怖がらなくていいんです。

それでも失敗するときはあります。でも、失敗に罰を与えてはいけません。罰を恐れて、失敗を隠すようになるからです。そして失敗は自分のせいにしても、他人のせいにしてもいけません。「失敗を許さない」と考えず、「成功率を高めよう」と考えれば、できるようになることは山ほどあります。

そうやって僕は色々なことを乗り越えてきました。今はロケットをまるごと打ち上げることができません。ロケット以外にも、人工衛星もまるごと造れます。僕らの会社には大きなタワーが立つています。宇宙と同じ無重力状態を作れる実験装置です。日本には僕らの会社にしかありません。あとはNASAとドイツにしかありません。僕らの会社には、日本の宇宙開発機構の人たちが頻りに実験に来られます。今ではNASAの人たちも来てくれるようになりました。憧れていた毛利衛さんや、「はやぶさ」を造った川口淳一郎さんとも仲良くなれました。NHKの

番組「超絶 凄ワザ！」では、紙飛行機を作って大学と戦いました。すべて、宇宙の仕事をしてきたお蔭です。

### 発明を生む思考

僕の会社はリサイクル産業用マグネットを作っています。解体した建物から出た鉄くずを有効利用するために使うマグネットです。市場占有率はほぼ100%です。日本だけでなく世界で使われています。不思議で仕方ありません。マグネットの作り方なんて、小学校5年生の理科の時間で習ったことです。釘に電線を巻いて電気を流す。これを大きくしただけ。発明をすれば、小学校で習ったことで会社が作れてしまいます。

発明のコツは簡単です。嫌なことを我慢しないことです。嫌なことや嫌な人に出会ったとき、無視したり愚痴を言ったりせず、「なぜ嫌なのか」と考える。すると、誰かを助ける発明ができるかもしれません。「なぜ」を考え、勇気を出して自分を救ったならば、その方法は他の多くの、同じ思いをしている人たちを救うこととなります。

が侵攻し、樺太はサハリンと呼ばれるようになつた。その時祖母は、懸命に働いて貯めたお金がすべて紙切れになつたことを知りました。だからよく言っていました。「お金はくだらない」と。お金があれば本を買って、中身を頭に入れなさい。それは誰にも盗られない。お金は知恵と経験を買うために使いなさいと。僕はお蔭で本屋が大好きになりました。そこで出会った『よく飛ぶ紙飛行機集』という本は僕に小さな自信をくれました。僕は小さい頃から片方の目が悪く、距離感がうまくつかめないため、球技がとてつもなく下手でした。「植松がこつちに來たら負ける」と言われ、僕は誰からも必要とされていないと思いました。とても辛かったです。あるとき紙飛行機を作つて体育館で飛ばしてみると、端から端まで真つ直ぐ水平に飛ぶ。すると、今まで僕を嫌っていたかと思っていた友だちが「おまえ凄いな、作り方教えてくれよ」と言う。頼られる。嬉しかったです。だから僕はこの本がもつと好きになり、この本に書いてある飛行機の設計の仕方を全部覚えてしまいました。

「なぜ嫌なのか」を考えるとき、大切なものがあります。それを僕に教えてくれたのはアニメ「トムとジェリー」でした。猫のトムがねずみのジェリーを捕まえる。「どうしてやろうか」と悪魔のトムが言う、天使のトムが現れて「そんなことしちゃだめだよ」と言う。すべての人の心の中にも恐い心と優しい心があります。昔から日本にも、こんな言葉がありました。「荒魂（あらみたま）」と和魂（にぎみたま）。考えるときは荒魂と和魂と自分との、三人で話し合いをするんです。そのためには言葉が必要です。もしこの三人が「うげえ、だるい、むかつく」というような言葉しか知らなかったら、どうなるでしょう。考えるためには、自分の心を伝えたり相手の心を考えたりする、美しい言葉が必要です。本を読んで見つけなければいけません。そうすれば、素敵な発明ができるかもしれません。

宇宙開発はお金がかかると思う人が多いかもかもしれませんが、僕の会社は国からお金をもらっている訳ではありません。自分の会社で出た利益で無重力実験などを行っています。社員はたった19人しかい

小学生の時、友だちがプラモデルを作りました。僕も作りたいと思いました。でも僕の父はものづくりの人だから、「プラモデルなんて簡単すぎてだめだ。男なら鉄で作れ！」と言う。僕は小学生の頃から父に、電気溶接などを教えられました。次に本屋で出会ったのは『ペーパークラフト』という本。これをコピーして拡大すれば、鉄でも作れるんじゃないか。僕は勉強して色んな大人に見せびらかしました。残念ながら紙飛行機の計算もペーパークラフトの計算も、ついに一回も学校のテストには出なかつた。でも僕は今、本物のロケットや飛行機を造ることが出来ます。それは「くだらないからやめろ」と言われたことを、やめなかつたからです。皆さんにお願いがあります。くだらないとか意味が無いと言つて、子どもたちの夢を奪わないでほしい。「分かつた」「できた」という喜びさえ奪うことにならないからです。すると、喜びをお金で買うようになります。不正で喜びを満たすようになるといけない。そして、学校が教えてくれることは世界の中のほんの一

ません。ほとんどが高校卒業です。それも文系です。文系の人は「それはどうやってやるんですか」と尋ねてきます。それでもロケット開発ができる。誰でもできるからです。

例えばロケットは軽い方がいい。だから僕らの造るロケットは世界でも珍しく、鉄より強い特殊なプラスチックで全体ができています。そのプラスチックはどこで手に入るのか。ホームセンターの隅っこで売っています。本当です。人工衛星に必要な精密なセンサーは、任天堂のWiiのリモコンに使っているもので作れます。科学は進んでいます。だから昔は「無理だ」と思つたことも、今ならホームセンターで手に入つて解決してしまうかもしれない。そんな素晴らしい時代に僕らは生きています。

### 祖母と本が導いてくれたこと

幼い頃、祖母が大事なことを教えてくれました。祖母は樺太で戦前から自動車の会社をやつて、頑張つて働いて大変豊かに暮らしていたそうです。ところが1945年、突然条約を破つてソビエト軍

部にすぎない。それ以外にも価値のあることが山ほどあります。子どもたちが大好きなことを、どんどん伸ばしてあげてほしいと思います。

### 「どうせ無理」をやめよう

僕が中学生になると素晴らしいことが起きました。スペースシャトルが飛んだのです。いっぱい本を買つて勉強しました。もつと嬉しいことに日本人が乗りました。北海道出身の毛利衛さんです。僕もいつか乗れると思いました。先生に將來を聞かれた時、僕は「飛行機、ロケットの仕事がしたい」と真剣に答えました。すると先生は「そんなのは東大に行かないと無理だ」と言つた。そして「おまえの成績で行けるわけがないだろう。現実を見る」と。僕は目の前が真つ暗になりました。そして現実について考えてみました。すると現実とは、過去なんです。過去は変えることができません。僕はそれから飛行機やロケットの勉強をたくさんしました。学校の勉強は後回しにした。その結果、僕は「飛行機やロケットの仕事はできないんだよ」と言われま

した。

変えられない過去によって未来を諦めさせるのは、とても恐ろしいことです。努力しても無駄だよと言われると、人間は頑張れなくなる。今できることしかできなくなる。すると、考えたくなくなる。そして自分の心を守るため、とても悲しい言葉を使うようになります。「自分なんて」「どうせ無理」。この言葉を言わなければならぬのは、「努力しても無駄だ」と言われた人たちです。

頑張れない人、できることしかしかない人、考えない人がどんどん増えていきます。そのスタート地点は1945年8月です。日本は戦争で焼け野原になり、復興のために大量生産が始まりました。やがてそういう会社が多くの人を雇うようになり、一流企業、大企業と呼ばれるようになった。人々はそこに自分の子を入れたと思うようになりました。なぜか。安定していて楽をしてお金をもらえと思うからです。その結果、応募が殺到した大企業は学歴を使って一次試験をしてしまつた。大学は学問探究の場では無くなり、企業に入るための資格になつてしまつた。

親戚のオジサンがやっているよ」と言つてくれるかもしれないよと。子どもには真摯に支えてくれる人が必要です。大人は人脈を駆使して、それをやっている人を探してあげてください。人が見つからなくても、本を探してください。そして仲間とは、何も同じ格好をして同じことを話す人たちのことではありません。「違う」ことを「素敵」と思つた方がいい。それが漫画でも伝記でも映画でも音楽でも、諦めない生き方をコピーして生きていくことが大事です。それが僕たちを、ひとりぼつちの絶望と死の淵から救います。

大事なものは「憧れ」です。ASIMO君が登場したのは、衝突しない自動車が出来たのは、鉄腕アトムに憧れた人が頑張つたからです。その結果、人の命を救う車が出来た。憧れは、未来を呼び寄せるパワーです。僕はマグネットを作る会社を経営しています。2004年、ある人と運命の出会いをしました。北海道大学の永田晴紀教授です。僕は飛行機やロケットを造りたかつたけれども、ロケット造りは危険も多いと、すつかり諦めて

楽と安定を求めた結果、学問は資格商法になつて、べらぼうなお金がかかるようになり、しかもお金で差がつくようになりました。

大量生産はもちろん今でも大事な仕事です。でも、そこに必要なのは知恵と工夫です。他の人と同じことしかしなければ、安いけれどたくさん売らないといけない仕事しかできなくなる。そのためには壊れやすい物を作ればいい。消費の強制です。30年かけてやつとローンを払い終えた家は、もはや住めない家になつていく。そうしないと新しい家が売れないから。新規住宅着工軒数が経済指標になつている国なんて、日本くらいです。

### 仲間を探そう

国家とは国民の力の総和、蓄積です。そのときに生きた人の能力を蓄えることが大事です。でも人件費が高いから日本人が働けなくなつてきた。今凄いスピードで無人工場が増え、ロボットが働き続けています。働く人がいなくなれば納税する人がいなくなる。公務員や国家も成り立たなくなります。

いました。ところが永田先生は安全なロケットを研究していると聞いた。おまけにお金が無いから諦めると言っている。僕らは力を合わせるようになりました。

人の出会いには意味があります。僕と永田先生が出会つて助け合えたのは、二人とも「足りなかつた」からです。人は足りないからこそ助け合えます。助けることは「余裕のある人の施しだ」と考える人がいますが、それは間違いです。それなら「余裕の無い人は助けなくていい」ことになるからです。でもそうじゃない。いろんな企業連携をしてきました。が、得意分野を持ち寄つた連携はうまく行きませんでした。逆に、自分の弱点をさらけ出した連携はうまく行きました。ぜひ足りないものを持ち寄つて、いろんな人と関わつてみてください。

### すべての人に「可能性」がある

日本は59年前、小さなロケットから宇宙開発を始めました。最初は個人の仕事からの出発でした。日本は当時、世界に通用する飛行機を造っていました。面白くなかつたのが、飛行機の輸出を国家事

この状態を防ぐことができます。ロボットにできないことができる人を増やせばいいだけです。それは「考える」ことです。既にそれに気付いている国もあります。フィンランド、イスラエル、スウェーデン。彼らは研究し、発明し、特許を取ります。だから世界から必要とされています。3つの国に共通しているのは、大学は無料、そして中学生の頃から発明の仕方や起業の方法を授業で教えていることです。

考える人とは「やつたことがないことをやりたがる人」「諦めない人」「工夫をする人」です。実は、この世のすべての人がそうです。例えば子どもは、そこにハンドルがあつたら回してみたいものです。でも「余計なことをするんじゃない」と言われる。諦めることを誰かが教える。何のためか。聞き分けの良い、都合の良い人間が欲しいからです。

どうすれば、やりたいことができるのでしょうか。「やつたことのある人」と仲良くなることです。だから僕は子どもたちに言います。自分の夢はほとんど人に伝えた方がいいよと。誰かが「それ、

業にしようとしていたアメリカです。戦後アメリカは日本に「飛行機を造るな」と言いました。日本は絶望して、命令されてもいないのに飛行機的设计図を燃やしてしまつた。でも絶望しなかつた人がいた。糸川英夫という人です。彼は「飛行機じゃなければいいんではよ」と言つて、ロケットを造り始めました。完全な屁理屈です。ここから日本の宇宙開発はあつという間に成長した。アメリカは「うちのロケットを買え」と圧力をかけてきましたが、日本は探査機「はやぶさ」を宇宙へ送り込みました。日本人の技術力の成果だと言う人がいますが、うではない。やめろと言われてもやめなかつた人たちが、奇跡を起こしたただけなんです。

すべての人には凄い可能性が 있습니다。中田選手もイチローも、坂本龍馬もエジソンも一人だつた。その一人が歴史を変えてきました。好きなことをやめなかつたら、そうなたただけです。好きなことは頑張れる。それが人間の本当の力です。「好き」があれば話題が増え、人とのつながりが増える。人と力を合わせられる。

一人の力は、一人の力じゃなくなりそうです。なぜ人を殺してはいけないのでしょうか。可能性を奪ってしまうからです。そう考えると、言葉で人の可能性を奪うのは殺人と同じです。「よほど頭が良くない」とか「センスが必要だ」とか「現実とは甘くない」とか言う人がいますね。最後はみな一緒の言葉になります。「どうせ」という言葉こそ、「努力は無駄だよ」と教える、最悪の言葉です。こんな言葉を浴びた人は自信を持つことはできません。自信が無いと、何をすればいいのかわからなくなりそうです。

### 自信が道を切り拓く

僕の会社ではロケット体験教室を開いています。「どんな夢だつて諦めなくていいんだよ」と言うためのロケットですから、小さいですが本物です。0・3秒で時速200キロを突破して空高く上がり、自動的にパラシュートが開いて戻ってきます。実際に宇宙空間で使える、本物のロケット装置です。子どもたちがロケットを作るとき、僕は「教えないから頑張つてね」と言います。「分からな

つたら調べたり人に聞いたりしよう」「学校ではカンニングはいけないけれど、社会では見て盗んで練習してね」と言います。すると頑張つて作ります。

先日、警察のご厄介になった20歳前くらいの子たちがロケット教室にきました。発射ボタンを押す段になると尻込みをする。彼らは自信がないんです。自信がないから強がり、暴力を振るう。でも私たちの作ったロケットは飛んだ。するとその子たちは荷物もゴミも全部片付けてくれました。優しくなつた。人間に必要なのは小さな自信なんです。

僕は34歳で初めて会社を経営しました。儲かっている気になり、大失敗しました。心が荒れました。そんな時、友だちに誘われて児童養護施設へボランティアに行つた。一人の男の子が夢を話してくれました。「もう一度、親と暮らしたい」。驚きました。自分を虐待した親でも、この子はまだ愛しているんだ。僕は何をやっているのか。だつて僕は人をやつつけて金を稼いでいたんです。その途中で、よその家庭を壊したかもしれない。自分の家族さえも見捨てようとしていた。

きります。夢とは大好きなこと、やつてみたいことです。仕事とは人の役に立つことです。夢と仕事は全然違うけれど、一緒になることも「あり」です。それに気付かせてくれたのがアメリカ人でした。アメリカで自己紹介した時、「本が好きです」と言うと、わくわくした顔で「どんな本を書いているの?」と聞かれた。「書いていない」と答えると、「お金で買えるということは、サービスしてもらっているお客さんですよ。自分でやるのが趣味で、それは仕事になるかもしれない。本が好きなら本を書いてみれば?」

と言われました。考えてみればアメリカの人口は日本の2・5倍くらいなのに、野球の球団は270あるし、マウンテンバイクもスノーボードも、個人の手作りの趣味が一つの産業になり、オリンピックの種目になった。僕は気付きました。日本人は夢も趣味も、買うしかないと思いが込まれているから、お金が欲しいんです。そこで生まれて初めて、自分の本を出版しました。あつという間に韓国や台湾の言葉に翻訳されました。どちらも受験勉強が大変な国です。

### 安心して夢を育てられる社会に

今僕の会社では、医療機械、農業機械の開発もしています。それは僕が小さい頃、いっぱい夢があつたからかなと思います。夢がたくさんあれば、一つくらいうまくいかなくても大丈夫です。僕はピアノとバイオリンを習っていました。が、中学生の時、家の手伝いをしていて指を機械に巻き込まれ、一部を失いました。もし僕が音楽しかやっていたら、あの怪我で絶望したかもしれない。でも僕は今でも音楽が大好きです。夢は一つじゃない方がいい。

教育とは何でしょう。失敗を安全に経験させるためのものです。それがすつかりおかしくなつたのは、失敗を否定する大人が増えたから。その人たちが、経験を避けて自信の持てない人間をたくさんつくってしまった。だから日本は国力を失ってしまった。でも大丈夫。「やつたことのないことを頑張る人」「諦めない人」「工夫する人」を増やせばいい。みんなの心の中に必ず入っている、小さい頃の魂を守ってください。それが10年後、

すると、小さい頃の記憶がよみがえりました。小学校1年から3年まで、僕は担任の先生からもの凄い暴力を受け続けていたんです。僕の学んだ飛行機の知識や祖父母が教えてくれた知識を否定され続けました。でもその先生は、実は家で夫から暴力を振るわれていたんです。暴力は連鎖します。しかも必ず弱い人へ向く。だから最後は子どもが犠牲になる。

僕はスタート地点の「どうせ無理」を無くしたら、もしかしたら児童虐待もなくなるかなあと思っていた。そうしたらロケットが造れるようになった。だから僕はロケット開発をやめるわけにはいかないんです。児童虐待を無くすための手段だから。僕は今、毎年約6万人の子どもたちにこうして話を聴いてもらっています。でも、いじめも暴力も減りません。僕の力が足りないんです。だから仲間が欲しいんです。

### 夢と職業の違い

大人は夢と職業をこつちやにして要求するから、子どもが混乱することも多いです。夢と仕事は分けて考えた方がすつ

15年後、この国を救うことになりました。

僕らは知恵と工夫で世界を救うために生まれてきました。「やつたことがない」という過去は変えられないけれど、未来はいくらでも変えられます。そこでお子さんに言つてほしいのは、夢を否定する言葉ではなく、「だつたらこうしてみたら」という言葉です。そうすれば、みんなが安心して夢を育てられる。そしてお子さんに「将来何になりたいの」と聞くときは、「なぜ?」を追加してほしい。「医者になりたい」「動機が「人の命を救いたいから」だとしたら、ドクターヘリも救急車もAEDも人の命を救うためのものです。「医者になりたい」と思つたら、道は一つ。しかし「人の命を救いたい」と思つたなら道は無限にあります。きつというんな可能性に気付きます。夢を諦めずには済みます。

誰もが「だつたらこうしてみたら」と言い続けたら、いつか虐待がなくなると思っています。皆さんのお力を貸してほしいです。今日は本当にありがとうございます。(2015年10月22日・グレイスチャペルにて)